

# S09地区 B基地の日常と 非日常

通りすぎる傭兵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは拙作「ドールズフロントラジオ 銃器紹介コーナー」

その作品の舞台であるS09地区B基地の日常を描くスピノフ作品です。

基本的に気が向いたら書きます。

# 目次

憧れを追いかけて	前編	1
憧れを追いかけて	後編	20



# 憧れを追いかけて 前編

ざくざくと枯れ葉を踏みしめる音に、金属片が擦り合う耳障りな音が混ざる。

立ち並ぶ木々にも、弾けたような弾痕が目立つようにもなってきた。

半ばから無造作にへし折れた立ち木、

焼け跡が染み付いた地面、

パーツの足りない戦術人形の残骸。

物音に神経を尖らせながら、ありふれた戦場の光景に想像を巡らせる。

敵はどこにいたのか、味方の配置はどうだったか、戦況の推移はどのようなものだったか。

硝煙の匂い、焦った声、響く爆発音。

かつり、とひとときわ大きい音が意識を現実に取り戻した。

見下れば数歩先に筒状の塊が転がっている。先ほどの音はこれを蹴飛ばした際に生じたものだろう。

拾い上げる。

その鉄の棒には赤い装束を纏った少女の腕があつた。あたりを見渡せば、上半身を失つた同じ意匠らしいドレスを纏う死体を見つけた。

「どうやらこれは彼女のものらしい。」

「一体、彼女はどの様にして死んだのか／壊れたのか興味はない。が、饞別くらいは暮れてやつてもいいだろう。」

踏みつけたせいで折れ曲がつてしまった弾倉を抜き、銃についた汚れを軽く払い、倒れた彼女の側へ立てかける。最後に開いたままの瞼を軽く撫でて閉じた。

「最後まで戦い抜いた彼女に休息を。」

Amen<sup>祈</sup>。

「名もなき残骸に祝福を。」

「死するものに平穩を。」

「願わくば、次があるならば。」

「貴方に、幸運が訪れますように」

「—————、—————。—————」

「お祈りは済ませましたか？」

「ええ」

「では行きましょう。目的地はもう直ぐですよ」

「ありがとう、ナーちゃん」

艶消しのロングコートに着いた土汚れを払い、彼女の死体を一瞥してこの場を去る。

少し先には双眼鏡で周りを警戒している様子のAR70<sup>ナーちゃん</sup>、また私のわがままに文句を言わず付き合ってくれていたらしい。

「ごめんね、目に止まっちゃやうとつい」

「いつもの事ですから。それにアタシはマスターの優しき、嫌いじゃないので」

「ありがとう、それじゃ行こうか」

「ええ、今日の仕事は大変ですよ」

この世界は残酷だ。

死ぬべきものが生き、生きるべきものが死ぬ。生死の境目が入り混じり、生者でも死者でもないものが闊歩する。私のような死に損ないが生きていられるのも、こんな混沌とした世界だからだ。

だけど、この世界にしか私に居場所がないとしても、こんな世界はきつとあるべき姿ではないのだろう。

間違った世界は正されるべきなのだ。

正すことが私が生まれた理由であり責務。

だから私は刃を振るう。

土は土に、塵は塵に、灰は灰に。

あるべきものがあるべき場所へ。

たとえそれが、かけがえのないものであっても。



「おはよう、ナーちゃん」

「おはようございます…… もうお昼ですけどね、マスター」

目を開けると、いつものように薄緑色の目がこちらを見ていた。そういえば仕事が終わって帰ってきたところだったっけか。

「ナーちゃん、今日の仕事は？」

「今日は仕事はありませんよ。昨日済ませてきたばかりじゃないですか」

「あれ、そうだっけ……？」

「もう、忘れっぽいんですから」

それで、どうするんですかと彼女は私に聞いた。

「お店、開けましょうか」

「はい、今日も頑張りましょう」



返す答えは決まっているのに、いつも彼女は私にそう聞いてくる。

人間の意思という余分をそぎ落とした人形のはずなのにその余分を求めるのは滑稽そのものではあるが、誰かが言ったようにその余分こそ人間の美しさなのだろう。きつと人形もその余分に憧れてしまうのだろう。

だからどうだというわけでもない。

単純に彼女は私を主人と慕い、私は彼女を相棒として頼るだけだ。

顔を洗ってくるね、と洗面台に向かう。

洗う、と言つても濡らしたタオルで顔を拭くくらいしかしない。ここはあいにくと最前線、水は高いから無駄使いはしたくない。

顔を吹き終わったところで、ふと鏡を見る。

灰色の髪に灰色の目、血の気の失せた顔。無表情が刻み込まれて剥がれないこの顔は、あいも変わらず死体のよう、客商売では致命的な欠点だろう。

そうだ、ナーちゃんはこの前「笑顔が大事」と言っていたっけか。

確かこのように、と口角に指を当てて持ち上げる。

にこー。

にこにこー。

にっこにっこにー。

…… やめておこう。背筋がぞわぞわする。

私がいっつもルーティーンを終え部屋に戻ろうとすると小麦とコーヒー豆の香ばしい香りが漂ってきた。

「今日はトーストですよ」

私の考えを先回りしたナーちゃんの言葉通り、ホカホカと存在を主張するトーストに、薄っすらと湯気を立てるマグカップがテーブルの上に乗っている。

「じゃあ、両手を合わせて」

「いただきます」

祈りを捧げる。

私たちの生きる糧となるため犠牲になった生けるもののために。私たちがそれを無駄にしないことを誓うために。

ちようど食事が終わったところで開店時間までもう少しとなった。

「お邪魔します、空いてますか?」

今日も可愛い鈴の音が来客を知らせ、子供っぽいハスキーボイスが耳に届いた。

寝間着をカジュアルなワンピースと店の銘入りエプロンに着替えて、階段を降りて椅子に座っている常連さんに声をかける。

「いらつしやいませ。ようこそ、雑貨屋『アーネンエルベ』へ」

今日もいつも通り、なにひとつ変わらない退屈な始まりだ。

そしていつも通りこの子供のようで子供でない、紫髪の常連さんは少しおかしな事を言う。

「早速で悪いんですけど、媚薬とかありますか？」

「……ウチは雑貨屋であつて薬屋ではないんですけどねえ」

「いやあ、押してダメそうなんで、逆に押されてみようかと。我ながら良いアイデアだとは思うんですけどね」

「アタシとしてはあなたの思考回路の不良を疑うところです」

「押してダメなら押されてみると」

「引いてみるの間違いですよ」

裏庭で育てている薬草を使ったハーブティーを入れながらナーちゃんと言連さんの話に耳を傾ける。

ウチにはカフェとしての面もあるため、少しばかりのカウンターもある。これといって美味しいお菓子やお茶があるわけでもないの、もっぱら利用しているのは毎日のように入り浸る彼くらい。

「相変わらずのようですね」

「ええ、相変わらずです。どれだけアタックしても振り向いてくれませんよ、はあーあ」  
いつまでたつても思い人が振り向いてくれないという、人によっては重いのだろう悩み。

そんな悩みを抱えてやれやれと言わんばかりに首を振る常連さんはその言い方とは裏腹に楽しそう。

かれこれ数年の片想い、一年や二年どうという事はないという余裕がそうさせるのか。

「ひとつアドバイスすると、媚薬なんてものは無いんです」

「そうなんですか？」

「ええ、実際のところは精力のつくものや栄養価の高いもので、子作りの為に役立つと言ったところでしよう。」

特定人物に惚れさせる、と言う便利なものはめったにないんですよ」

「自分で頑張れつて事ですね、俄然やる気が出てきました！」

「とはいえ元気になればそれだけソツチの方の力も高くなるわけですし、あながち間違いでは無いですね」

「マスターさんその手のものがあるなら売ってください！」

相変わらず意見を二転三転させる人だ。しかし大事なお客様、希望に答えるのが店長

としての務め。

「代表的なものではスツポン、エスカルゴ、ウナギなどでしょうかね。他には生卵や馬肉などが当たると思っています」

「どれもこれも天然ものでべらぼうに高いじゃないですか、ヤダー！」

「でも買うんでしよう？」

「買いますよそりゃあ」

さも当然のように財布から黒いカードを取り出す常連さん。何を生業なりわいとしているかはあずかり知らぬところではありますが、ひとりで店の経営を支えてくれるほどには高給取り。自然と職に予想はつくところではありますがここは黙っておくべきでしょう。

「お代はしめて……これですね。お得意様ですし一割引きにしておきましょう」

「一割引いてもこの金額とかどんだけ高いんですかヤダー！」

「天然物は高いですからね」

「うう、サラバ今月の生活費」

「相変わらず無計画ですね。また給料前借りなんてしても知りませんか？」

「しばらくは大丈夫ですよ。最悪の場合貯金に手をつければいいのですが……あれは結婚式用の費用で……」

「まったく、無計画なのか計画的なのか」

領収書を前に彼は指折りながらブツブツと呟いていたが「今月は糧食生活ですねぇ」と諦めたようにため息をついた。

「ところで、あなたの思い人はどのような人のですか？」

「おや、突然なんでしょうか」

「なんとなく気になつてしまひまして。貴方のような情熱的な恋ができる相手というのは、同じ女性として気になるものですよ」

「写真ありますよ、といつてもそれなりには古いものですが」

彼女ですよ、と財布から今時珍しいアナログの写真を取り出した。

そこには正装らしい軍服のような格好をしたニコニコと笑う常連さんと、彼より一回り大きなふてくされ顔の女性が写っていた。ショートカットの茶髪に軍帽がよく似合う、可愛らしいひとだ。

「へえ、かわいらしいじゃないですか」

「でしょう？ でも、先輩の魅力はそこだけじゃないんですよ。それに、僕の生き返らせてくれた恩人でもあるんですよ」

「生き返らせる？ 医者なんですか彼女は」

「比喩ですよ。ほらたまに言うじゃないですか。心が死んでる、つてね。

毎日が苦痛でしかない。

目標も、夢も、楽しさも、何もかもがない。そんなただ生きてるだけの人間を死体と呼んでも差し支えないですよ。昔の僕はまさにそうでしたよ」

どこかここではない、きつと過去であろうどこかを見ながら常連さんは楽しそうに語る。

「人生は一期一会、出会う人は様々でありきつと一回きりなのだ、なーんてことわざがありますけど、先輩がそうだったんでしようね。」

僕の前に現れた彼女は鮮烈的で衝撃的で劇的に、死んだ僕を殺して生き返らせてくれたんです。

理由はありません。先輩がなにをしてくれたわけでもありません。たった一度だけ、初めて会ったとき。

なんて表現すればいいんですかね……ただそう思ったとしか答えられないんですよー。

あの時です、彼女に憧れたのは「恋をしたのではなく?」

「ええ、憧れたんですよ。不思議なことに。結局、先輩のやる事なす事全部できなくて。それでも諦めきれなくてずっと背中を追い続けて……ふと思ったんです。」

先輩めちやくちや可愛いな、って」

「ごうんごうんと備え付けの空調が動く音だけが場を支配する。そして少しだけ時間が経ち、一言。」

「と言うわけでボクが先輩に恋をするキツカケでした、おしまい」

「…… 釈然としません」

「恋というのはそういうものなのです。人形にだって恋はできると思いますがね」

「信じ難いですね」

「きつと貴方にもいい恋人が現れますように…… つてなんですかその顔」

「貴方のようなものであればお断りです」

「なんでですか!? こんな情熱的な恋人イマドキ居ません! むしろそんな恋人を得た

ことに運命をー」

「まだ片思いでしょうに」

「ぐつつつふつつつ!」

ナーちゃんの遠慮ない正論が常連さんに突き刺さる。

「こんなにも彼女のことを愛していると言う常連さんで、しかしラブレターひとつ送ったことがない奥手なのだ。それを聞いたときは驚いたものだが、理由を聞けば納得もできた。」

憧れの人に釣り合うようになりたい、告白するのはこれからだ。彼にとって彼女は恋



する相手であり、憧憬を向ける対象でもあるのだろう。

こんな綺麗な願いを抱く人間を見るのは久しぶりだ。

「ついでに言うところこや私、ナーちゃんのことはどう思ってるんですか？」

「そうですね……ここにきたのも偶然ですし、第一印象は変な人だなあつて感じでしたね。

マスターさんは肌が見えないくらいびっしり包帯巻いてる変人ですし、店員の人形はボクだけにアタリが強いですし、客観的に見れば良くはないとは思いますがね。

話してみたら面白い人でしたし、良い関係であると思いたいですね。そちらは？」

「大丈夫ですよ。貴方はこの店の大事な常連さんで、楽しいことを話してくれる大切なお客様です」

「それ素直に金づるって言いませんか？」

「そうだとしても、ですよ」

いじらしげに笑って見せると、常連さんは諦めたように苦笑いを返した。

それから何時間とたわいのない話をした、いや、常連さんだけが一方的に話すばかりだった。

近況のこと、先輩のこと、考えが古臭い上に暑苦しい上司のこと、イタズラと絵だけが取り柄の基地のマスコットののこと。彼は店に来ると決まってその話をするが多

い。

嫌そうにその話題を口にしてゐる割には楽しそうで、きつと、彼がいる場所が過ぎやすいんだと察することができる。不思議に思うのは、何故それをここに來て話してくれるのかということくらい。

何杯か茶を飲み、冷めてしまった最後の一杯を飲み干したところで常連さんは席を立った。

「じゃあいつもの一箱頼みます」

「また箱ですか？ もつと身体を労ってください」

「いいじゃないですか、死ぬわけでは無いのでしょう？」

「しかしあれは……」

「彼は頑丈なので問題ありません」

「と言うわけです、まあ死ぬほど痛いには変わりありませんがもう慣れましたよ。」

しかし、最近のナノマシンは凄いですねえ。飲んだ次の日は身体中が軽いですよ。これなら書類仕事も捗るといふもの。実は隠居生活中の科学者か何かだったり？」

「お客様」

「……と、詳しいことは探らないこと。この店のルールでしたね、失敬失敬」

しー、と人差し指を立てるナーちゃんをよそ目に私はカウンター下から抱えるほどの

大ききの箱を取り出す。常連さんはその小柄な体格では抱え込むほどの箱を両手で受け取ると、おぼつかない足取りで出口へ向かう。

「はい、お代はサービスでー割引ですよ。」

用量用法は守って……………」

「はいはい、わかつて……………」

『緊急警報！ 緊急警報！ 地区周辺にE・L・I・Dを確認しました。住民の皆さんは速やかに避難をお願いします！』

繰り返します！

緊急警報！ 緊急警報！地区周辺に……………」

「っ！」

「危ないっ」

荷物を放り出して外に飛び出した常連さん。ナーちゃんが慌てて滑り込んで木箱をキヤツチするのを横目に見ながら私もつられて外へ飛び出した。

奥まった通りの奥にある立地だからまだ混乱は目に見えて見られないものの、窓から顔を出す人影や同じく外に飛び出してきた人影もチラホラ。

そこに共通するのは不安や恐怖、そして混乱。

いつもの日常が崩れ去るといふ危機に震える姿ばかりが私の目に見える。

だが、彼は違った。恐怖、不安、混乱も勿論あるはずなのに、それを伺い知ることはできなかった。

勇気、責務、覚悟。

そして背中をあこがれ追いかける必死さ。

ああ、なんとという事だろう。

こんな顔は、わたしには出来そうにない。

嫉妬や劣等なんてつまらない感情がわくまえにわたしの心中を埋め尽くしたのはたったひとつの感情だった。

なんて、憧れてしまいそうな人なんだろう。

こんな人に、わたしはなりたいのだ、と。

「……って！　なんでついてきているんですかマスターさん！　民間人は早くシエルターに」

「目的地はどちらですか」

「…… G & amp ; K社　S O 8地区　作戦司令部です。」

実はボク、P M Cなんですよ。あんまり言いたくなかったんですけどー」

「大体わかりました。では捕まっていますか？」

わたしは彼を抱きかかえるとそのまま地面を踏みしめ、飛び上がる。

G & Kの基地…… あそこでもいいのかな。脳内に無骨で排他的な建造物を思い浮かべながら屋根伝いにテンポよく駆けていく。眼下では非難するらしい人々が道にあふれ、こちらに気がついているのはごく僅か。おそらく騒ぎになることもないはず。

「ちよつ、これつ、マスターさん?!」

「舌を噛みますよ」

「いったいどういうひゃあああああ!!!」

常連さんの悲鳴を耳にしながら鉄筋コンクリート製の屋上を踏みしめ、さらに上空へ飛び立つ。

軍用車らしい車列。飛び乗る様々な服を着た少女らしき人影、慌ただしく動き回るカーキ色の軍服姿。

見えた、多分ここが基地。

物陰の人気のなさそうな倉庫…… あそこが良さそう。

なるべく死角になるような場所を選んで着地、無意識にお姫様抱っこをしていた常連さんを下ろし、肩を揺さぶる。

「到着しました……大丈夫ですか？」

「」

「もしもし、起きてますか？」

「……アツハイ、起きてます」

「よかった。目的地ですよ」

「ああどうも……ありがとうございます」

慣れないことをして疲れたと言わんばかりに頭に手を当て、フラフラとおぼつかない足取りで影から出ようとして立ち止まる。

「貴方は……一体なんなのですか？」

「詮索は不要だとお教えしましたが？」

「ああ……そうでしたね。なんでもないです」

「でも、貴方の恋話のお礼に一つだけ」

わたしはワンピースの裾を少しだけ持ち上げると、目一杯にからかうような顔を作って言った。

「わたし、実は魔法使いなんですよ」

風が舞う。

木の葉が踊る。

時刻はもうすぐ黄昏時。

死者と生者の境目が曖昧になるゴールデンアワー。

そこでわたしは死者へと戻る。

土は土に、塵は塵に、灰は灰に。

あるべきものがあるべき場所へ。

間違い続けるこの世界を正すために。

# 憧れを追いかけて 後編

「戦況は！」

「見ての通りだ、芳しくない」

『第12小隊損害50%を超えました！』

『第6小隊、弾が足りないよ』

『第3小隊です、補給まだですか？』

『第1小隊まだまだいけるよ！』

「補給急げ！ 1秒でも長く足止めしろ！」

「市民の避難率7%、完了までの予測時間はあと4時間は………」



「練度が足りない10小隊を避難に回せ！ 少しでも早く避難させるんだよ！」  
『こちら第10小隊それどころじゃないんですケド！』

いつもは物静かで埃を被っている大規模作戦指令室。有事の際くらいしか使われないこの部屋に慌ただしく人が出入りしているという事は、つまりそういう事なのだ。

前線にいる戦術人形の報告と怒号が飛び交うなか、常連ことS08基地戦術司令部所属、情報処理班班長のこの男は戦況をもとの数秒で把握した。

「部隊の損耗率は3割越えに敵の総数は未だ知れず。

予備戦力も無いとはいよいよ不味いですね。偵察は」

「スカウト班の第4小隊は避難にあたらせている。市民の避難が最優先だ、そんな暇ねえよ」

「で、これからどうしますか」

「マニュアルに従えば軍が来るまで遅滞戦闘、矢折れ力つきるまで…… って奴だ。もちろんそんなことはやらんがな、誰だって死にたかないだろ、お前ら」

腕を組む青年指揮官のらしくない物言いに思わず周囲から笑みがこぼれる。気の利いた通信手が回線開きますねーと無線の電源を入れ、指揮官に投げ渡した。それを掴むと軽く息を吐きニヒルに口角を上げながら指揮官は告げる。

「人形ども！コイツが終わったら飯おごってやる、だから死ぬ気で生き残れよ！」

「『了解っ！』」

「お前ら！ あいつら飯が食いたいとき！ だったら、その願い叶えてやらんな！」

「『了解！！』」

「戦術指揮官！ 作戦指示！ 通信班は情報を集約してはつきりした数字を出させろ！ 情報班は通信班のサポートに回れ！ 補給班はアイツらを少しでも早く戦場に戻せ！」

「了解、4、7、9小隊は自警団と協力して避難を急がせるんだ！ 6小隊は3小隊と交代急げ！ 12小隊は現在拠点を放棄し第2次防衛ラインまで後退！ 11小隊は撤退を援護！」

「第1、2、5、8、10小隊、残弾と損耗報告！」

「倉庫前にトラック回せ！ 前線に弾を運ぶんだ！」

「こちら情報班、敵分布の報告を願います。余裕があればHG戦術人形は映像データタダげてください」

インカムを掴み今までに纏められた情報を目で追いながら指示を出し、部下に命令してマップデータに紐付けしていく。二、三のマルチタスク程度出来なくて情報処理班が務まるかと言わんばかりに凄まじい速さで情報を消化、整理し洗練してゆく。

「現状配置出ました！ L—2、S—5、S—8にELID多数、K—7にて特異個体を

確認。Kラインに徹甲弾装備の13小隊を対応に回してください。12小隊担当のSラインは放棄、5、11小隊に合流を。

第1小隊、Kラインの8小隊と交代は可能ですか?」

『こちら第1小隊ART5561、こっちにも特異個体を確認、私としては撤退したいかも。戦術さんはなんて?』

「確認しました、こちら戦術班班長です。第1小隊のJラインを放棄した場合戦場が分断される可能性が高い。3小隊を補充が終わり次第向かわせませ、どうにしかして下さい」

『どうにかって言っても……ってうええええ?!』

「どうしましたか?」

『鉄血人形の反応を探知! どさくさにまぎれて来たみたい!』

「鉄血人形だとう?!」

『こちら第2小隊、現在鉄血兵と交戦開始!』

『第6小隊鉄血兵見つけちゃいました、しかも装甲持ち!』

『10小隊ちよつと不味いかも、なんか鉄血兵らしいのが見えた!』

鉄血の言葉に皆が殺気立つ、それと時を同じくして鉄血の発見報告がどの部隊からも飛び込んでくる。

「主に北西方面を中心に鉄血部隊を確認。総数は不明ですが、1000を大きく超えます！」

「嵌められた……！」

「鉄血がELIDを操作できるとか反則じゃ無いですか！ インチキも大概にしろつてんですよー！」

『えーこちら第2小隊ガリル、アチラさんもELIDに噛みつかれてるから操作できてるんとは違うと思うで。』

『多分たまたまちゃうかなあ』

「それはそれとして問題だよこんちくしょう！」

『立て込んでるところ悪いけど悪い知らせ、J-2にてデストロイヤーモデルも確認！ 現在の残弾では対応困難、私としては撤退したいところ！ 指揮官、どうする？』

「どうもこうも戦うしか道は無い！ 4小隊を戦場に出して援護に回す、対応可能か！」

『せめてRFかMG付けてよ！ ARメインじゃ抑え込めないってば』

「第3小隊のM14は回せます、それでどうにかなりませんか」

『そんな豆鉄砲じゃなくてデカイのちようだい！ 7小隊のTAC-50は？』

「TAC-50、どうか？」

『こちら第7小隊TAC-50、ごめんなさい避難指示で手が離せないの！』

「……だそうだ。現状戦力でどうか耐えてくれ」

『ああもう帰ったらパフエご馳走してよね指揮官！ 一番高いやつ！』

「無事に帰って来たらパフエでもなんでも奢ってやるから死ぬなよ！」

『言質は取ったんだからね〜』

慌ただしい戦場に少しだけホンワカとした空気が流れる。本人たちは隠しているつもりなのだが、指揮官とART556がベツタバタに付き合っているのは暗黙ではあるがこの基地周知の事実。

「いやあ、お熱いですねえ」

「結婚した方がいいんじゃないか」

「さっさと押し倒せばイイのに」

「やることヤツてるくせに……」

「お前らはさっさと仕事に戻れえ！」

『ところで指揮官、さっきなんでも奢るって言ったよね、じゃあ2人つきりでー』

茶化しすぎて頭を叩かれているとバツツ、と嫌な音を立てて通信が途切れる。それと時を同じくして通信班から全部隊の通信途絶の報告。しかしレーダー上の戦術人形の反応自体は途切れているわけではない、となれば理由はひとつ。

「通信班！ 解析！」

「…… Jライン前方にて妨害電波の発信を確認！レーダーに害はありませんが通信不可能！」

「通信妨害とは洒落た真似を……！」

「こちらから指示が出せなきや指揮系統が崩壊します、戦線が崩壊しますよ！」

「通信班は復旧を急ぎます！ 補給班は作業を継続、指示あればこちらで集約します！」

「…… おいお前、私物で衛星通信装置あつたよな」

「ありますけどそれが？ まさか」

「最大出力なら通信妨害を無理やり上書きして通信通せるだろ、アレ」

「でも近距離じゃないと厳しいとは思いますが、てことは」

指揮官がさせようとすることを想像して思わず血の気が失せる。

「指揮官としての命令だ。今すぐ通信を復帰させろ、いいな？」

「戦場に出ろつてことですか?! しかもよりにもよつて激戦区のJラインに！」

嫌ですよ死にたくありません正気ですか！

「正気だつたらこんな仕事やつとらん！」

いいか！ 俺は死んでこいとは言つているが死ぬとは一言も言つとらん！ どうにかして通信を通して生きて帰つてこい！ いいな！」

「んな無茶苦茶な！ だいたい確証なんてこれっぽっちも無いんですよ！ 勝算は、

勝算はあるんですか！」

「思いつきを数字で語れれば苦勞しない！」

「ああもう最悪！通信班！ボクの衛星通信のチャンネルはいつものです、今のうちに繋いどいでください！」

あとせめて3小隊と同時に出してくれるくらいの温情はありますよね？」

「1秒が惜しいんださつきと走れこのヘタレ！」

「あんまりでしよそれは！」

指揮官から半ば叩き出されるように司令室を飛び出し向かう先は車両格納庫。

戦場にはおおよそ不釣り合いなボックススパンに飛び乗るやいなアクセルベタ踏みフルスロットルで走り出す。

「おい待った！せつかくだから弾薬つませろこのおつちよこちよい！」

「……あ、戻ってきた、律儀だねえ」



「まったく今日は厄日ですね！」

弾切れになったマガジンを投げつけながらぼやくと同時、レーザービームがドアガラ

スを突き破り助手席を焼く。

それに目をくれる暇もなくフロントガラスにへばりつくE・L・I・Dをハンドル操作で振り落とし、ドアに取り付くものは護身用のMPXの銃床で殴りつけてひっぺがす。

9mmパラベラムを片手でばら撒いて牽制しながらギアチェンジし、時折飛んでくる迫撃砲弾をハンドドルさばきと緩急をつけて躲す。

割れた窓ガラスの破片が頬を掠め、冷や汗が額をつたう。

有り体に言って、絶体絶命のピンチだった。

通信が遮断されている以上本部からの情報は期待できず、出立直前の敵配置から予想して敵の少ないルートを組み立てるしかない状況。武器らしいものは護身用の私物サブマシンガンと支給品の手榴弾数個のみ。

さらに戦場とは目まぐるしく変化するもの、運が悪いのか必然と言うべきか彼はよりにもよってE・L・I・D鉄血兵が入り混じる激戦区の市街地跡に飛び込んでしまったのだ。

人間であれば見境なく襲いかかる感染者にグリフィンのエンブレムがデカデカとペイントされたボックスバンが狙われないはずもなく、かろうじて攻撃をかわし続けた。た。

「せめて第一小隊と合流すればなんとかなるでしょうか。追加弾薬も詰め込まれた事で



すし設営までの時間は稼げるでしょう」

ただ問題は、と後部座席の代わりに詰め込まれた荷物を一瞥する。

彼がツテで手に入れたWW3時代の旧式衛星通信装置。ハッキングから通信なんでもござれの便利品だが今回のような事態は想定なんてしていない。

防弾装備を三重にした後部座席がそうそう破られることもないであろうが、不測の事態がある以上わからない。しかも防弾設備が電波を阻害するせいで今回は装置を車の外に出さなければならぬのだ。

「いよいよ年貢の納めどきと言うやつですかね…… つとおおお?!」

目の前のビルを派手に壊しながら現れたのは5mサイズはあるだろう大型モニター。頭頂部あたりに見えるライムグリーンは文字通り噛み付いているART556の髪か、なんて事を思う前に、

(あ、死んだなコレ)

脳内を駆け巡る走馬灯、そしてついでに映るのは愛しの先輩とのあれやこれやら。

「短い人生でしたね……」

「いいえ、まだまだ先は長いですよ、常連さん」

今にも振り下ろされる拳が前兆もなくバラバラに崩れ落ち、飛び散る血飛沫と舞う肉片がフロントガラスを赤に染め上げる。

急ブレーキをかけ車外におりたこの男の目に入ってきたのは、ボンネットから彼を見下ろす灰色の目の持ち主。こんな場所にいるはずのない彼女に彼は見覚えがあった。

「こんな形で出会いたくは無かったのですが、お久しぶり、いやさつきぶりですね、常連さん」

苦笑いしながら恥ずかしそうに頬をかいているらしい、あの雑貨屋の店主<sup>マスター</sup>だった。

「少し待ってくださいね、今に終わらせますから」

「待ってください、それはどういう」

『死とは終わりであり、救済である』

予備動作もなく幻出する大鎌と足先まで丈がある長い黒コート。いつのまにか解けた包帯が風になびき、その下にあるマスターの素肌が露わになる。

それは乾いてひび割れ、血の気の失せた灰色とくすんだ赤が主張していた。ある日本の都市伝説に語られるような口裂け女のように人間とは思えないほど裂けた口が聞き覚えのある声を発する。

「……縁あってこのように人間らしく過ごさせてもらっています、私も彼らと同じ死体。ただ魔術を使つてなんとか死体のまま生きているんですよ」

「言っている意味が理解できないんですが！」

「私は魔法使いなんです、さつき言ったでしょう？」

腕を斬り飛ばされ、それでも襲いかかってくる大型ミュータント。彼女はそれに向き直ると、無造作に鎌を振り上げた。

「さて、何か手伝える事はありますか？」

胴体を細切れにされながら崩れ落ちる死体を背景に店主は言う。

もつちろん、と彼は笑顔で返した。

「今ちよつと厄介ごとを抱えてまして。護衛をお願いしたいですね」

「承りました。他ならぬ常連さんの頼みですから」

「なんかぐわつて、ぐわつて！ いつのまに超能力になったのさちんちくりん！」

「ちんちくりんとはなんですか！」

立ってるならばなんでも使う、それが戦場での流儀。

こちらに駆け寄るライムグリーン色の戦術人形を見ながら、彼はいつもの悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「んじやさつさと乗ってください！ 目的地まではもう少しかかります、状況は中でお話ししますよー！」

「わかりました、ナーちゃんは…… うん、わかった。

それではお願いします」

「ARTはJラインポイント6—3—4に皆を集めてください、そこにコイツを設置し

ます」

「了解っ！ でも護衛はその死体もどきに任せていいの？」

「彼女は信頼できますよ、現地で会いましょう！」

「わかったよ、でも遅れないでね？」

「それはこっちのセリフですっ」

乗った乗ったと手招きし、しっかりと助手席でシートベルトを締めたところを確認してアクセルを踏み込む。法定速度を軽視した速度で景色が流れる中口早に現状を説明していく。

「現在このS08地区にE. L. I. Dの大群、数は不明ですが1000は軽く超えているのが来ています。」

現状ボクらでは対処はできず、正規軍に応援を頼んでいるところですが、間が悪いことに鉄血まで襲いかかってきた始末。

戦況を五分に戻すためには鉄血の通信妨害をいち早く解消することが不可欠です。それがボクの任務って訳ですよ」

「……難しいですねえ」

「難しいですか?! 難しい言葉は省きましたよ！」

「冗談です、要はそのお手伝いをしてほしいって事ですね？」

「E. L. I. Dはボクでは倒せませんからね、頼みますよ」

それでは行きますよ、とポイント6—3—4、廃棄されたデパートの正面玄関に車ごと飛び込む。

目指すは屋上、この廃市街地で一番高い建物だ。

(思うんだけど、相手も同じこと考えてたりして)

この襲撃に長い時間をかけたとは考えにくい。E. L. I. D襲撃の前後に合わせ、行動しているなら行動時間も短く、それでいて妨害電波の効果が高い場所、要は高所で電波を広く届かせることができるこの場所は押さえたいはずだ。

そう考える彼も多少は戦略に通じているとはいえ情報班所属のため戦術に詳しいわけでもない。

なんとかなるさ、と考えを放棄して前を向く。

(護衛も居なかったし、行けるでしょ！)

「口閉じといてください、ちよつと揺れますよっ！」

「もつとひゃきにいつてくらさい！」

ボロボロのエスカレーターめがけアクセルを踏み込む。そんじよそこらのヤワな乗用車ではなくこちらの車は4輪駆動の軍用ジープの改造品、馬力もタフネスも段違い。片側のタイヤを壁に引っ掛け半ば無理やりながらも苦もなく上階へ登りつけた。

舌を噛んでひーひー言っている店主を他所に3階、4階と順調にエスカレーターを駆け登る。

「ところで店員さんは？ 人形でしたし何も知らないんですか？」

「彼女には全部話していません。元戦術人形、と言っていましたね。彼女には私と同じようにE、L、I、Dに対抗する力を持たせてますので問題はありません。」

連絡は入れますから近いうちに合流出来るはずですよ。返事がないのは少しだけ不安ですが」

「連絡？ 通信妨害を受けてるいまにですか？」

「魔法使いですので」

きゅい、とタイヤがリノリウムの床を噛む音が響く。

2人が外に出れば踏みしめた場所からふわりと埃が舞い上がった。

最上階、イベント用に作られたらしいこの大型のスペースには当時の喧騒の面影はななく長い年月放置されていたことを示す薄埃が一面に積もっていた。

「ぶえつくし！ 埃まみれで思わずくしゃみが……早いとこ設置して帰りましょう」

「あなたは本当にマイペースな人です」

「全くだ。戦場だというのに随分と呑気なものだ」

舞い上げてしまった埃を吸い込んでむせる男に気を使うマスターの間に流れる弛緩

した空気を硬質な靴音が上書きする。

「それとも、ここの戦術的価値を我々が理解していないとでも思ったか？」

「ハイエンド・モデルですか……！」

「シーカード。まだ試作段階ではあるが」

白髪長身、正体不明の武装を携える鉄血戦術人形が2人の前に立ちふさり、空いた左手でこちら側に何かを投げつけた。同時に店主が鎌を幻出させ振りかぶり、男は肩にかけるMPXの引き金に指をかけようとして、

「戦術人形を解体することなど、造作もない」

「ナーちゃん?!」

「て、店員さん……！」

彼女がこちら側に無造作に放ったものは。

かつて店主と働いていた店員、戦術人形『AR70』ことナーちゃんの右肩から左脇に向けて袈裟に切り裂かれ右腕と下半身を失った彼女の成れの果てであった。

「そんな……」

「この程度で動揺するか、未熟者がっ！」

「くうっ！」

動揺する男に襲いかかる剣閃に割り込むように鍔迫り合わせる店主。

「プラズマの刀身を避け発振装置に持ち手を滑らせることでなんとか均衡を保つ。

「ほう、そんな曲芸がいつまで続くか!」

「対人戦闘は苦手なのですがっ……」

挑発的な掛け声と同時にプラズマブレードの赤い光と鎌の灰色の軌跡が舞い踊る。

「ちよつと! 魔法使いなんですよね! 魔法でどうにかならないんですか!」

「どうにもなりませんよ……」

「ぎえあああ喋ったあああ!?!」

「喋りますよ、人形です。しかも元戦術人形ですし」

「ああああ、あ、そうなんですか」

「下半身なくなつたくらいじゃ死にませんよ。では話を戻しますが、マスターには彼女に干渉することは難しいですね。こればかりは領分が異なりますので」

「領分?」

「貴方達の得手不得手のようなものです。マスターは死者…… E. L. I. Dをはじめとする者には強いですが、人形をはじめとする『生命ではないもの』に干渉する力は大きくありません。

「そもそもマスターの魔術の系譜は墓守の霊を鎮めるための魔術に端を発するものです。ノベルのように相手に干渉、攻撃できるものは無いに等しい」



「それじゃあ……」

「残念ながら」

ざしゅ、と浅く皮膚を裂く鈍い音が何度も聞こえる。それがどちらなのか、もうわからない。

「せいぜいもつて5分。そこが限界でしょう」

悲観した表情を見せ歯噛みするAR70。

「私が、もう少し頑張れば何か変わったのかもしれないが……」

「いいえ、3分、いや1分で十分です！」

後部ドアを蹴り開け、コード類を繋ぎ合わせ、装置からキーボードを引っ張り出し、キーに指を叩きつける！

「このチャンスを逃さずして男張れませんでば！」

ボクを見誤りましたね鉄血のハイエンド、それでも士官学校主席で軍の就職蹴飛ばしで今の仕事やってんですよ！

超一流とは言えませんがこれでも腕は一流との自負があるんでね、そりやもう妨害電

波上書きと言わずハッキングしてそっちの戦略も上書きしてやりますよ!」

「そんな大言、よくも叩けたもの!」

「大言? ボクは出来ないことが言わない主義ですっ!」

目まぐるしく動く数字のられつを追いかけながら、勝利を宣言するかのように男は止まらない。

「無線が飛ばせればウチの精鋭が駆けつけますよ、市井に降りた戦術人形1人倒したところで試作ごときがイキってんじゃないってんですよ!」

「サラツとデイスられてません私?」

「50%掌握っ! おやおや記録更新ですかあ? それとも鉄血のセキュリティがよわ

よわなだけですかあ?」

「..... その物言い、頼もしい限りです!」

斬撃が床を抉り、熱波が髪と肌を焼く。互いの服を切り裂き、血液が染み出し血溜まりをつくる。

それでも手は止まらない、いや止められない!

「掌握率80パーセントオ! あと10秒で終いです!」

「人間ごときがやってくれる.....!」

「隙を見せましたねっ!」

「なにー」

「疾っー」

一閃。

鎌の石突きがシーカーの鳩尾を捉えた。

「これで、終わりです」

「こいつで、終いです！」

硬質の物体が砕けると同時に、躯体が力を失い倒れ臥す。

エンターキーを叩くと同時に、液晶画面に100%の文字が踊る。

ここに戦いは決したのだ。

「イエスイエスイエース！ ボクらの完膚なきまでの勝利！ 見たかあのクソ上司！

無線開通全通しどころか鉄血兵もゼーんぶシャツトダウンしてくれたわザマーミロ！

これがボクの本気ですつてんよ！」

「勝った……の……？」

「我々の勝利です、マスター」

「文句なくボクらの勝ちですよ！ みーたか暫定黒幕！ 人間舐めんな！ こっから

「ボクらの反撃ターンです！ 今までの鬱憤晴らしてくれる！」

腕を大きく振り上げガッツポーズを掲げながら高らかに勝利を宣言する。

それと正反対に肩で息をする店主。羽織っていた黒い外套も、中に着ていた店の制服もスタボロだ。

無線が鳴る。

『繋がったっ！ てことはやってくれたなこの野郎！ 今夜は祝勝会だ！』

「あつたりまえですつてよ！ しこたま飲むぞー！」

『程々にしとけよ……と、真面目な話だな。まだ無線が繋がったばかりで正確には掴めてはいないが、今んとこ2次ラインまで防衛できている。』

穴が開いた所は新米人形どもの自己判断でなんとか埋められたらしい、なかなかやつてくれる。

さて追加の任務だ。

状況終了まで無線装置を護衛しろ、こいつが終わったら打ち上げだ！」

「了解っ！ ところで2人ぐらい追加で招待しても構いませんね？」

『ああ？ 別に構わんが』

「そんだけ聞ければ満足です、それでは」

無線の電源を切るや否やAR70を小脇に抱え満面の笑みでこう宣言した。

「とういわけなので、一緒に祝勝会にいきましょうお二方！」

「いや、とういわけなんですか」

「どうもこうも、ボクはお2人がいなければそれはもうとつくの昔にくたばってましたんでね。」

命の恩人、借りを返したいだけですよ。

あー、お酒飲めませんか？ だったら別にご飯だけでも奢らせてくださいよう！」

「いえ、私は……」

「魔術師がどうのこうの？ ですか？ 安心してくださいフリーランスの傭兵にしときゃいいんですよ今時生身でミュータントなき倒す人間1人や2人いるでしょう？」

にこにここと笑みを浮かべたまま詰め寄る男に、店主は指をモジモジとさせながらそっぽを向いた。

「わ、私は、ただ……」

「マスターをあんまりいじめないでください。生まれてこのかた友達なんて出来た試しがないんですから」

「おや心外な。少なくともボクはあなたのこと好きですよ」

「えっ？ それって……」

「アレですよアレ。ともかくこれからよろしくお願いしますよ、——」

「いま、名前で……」

「ええ、まあ、なんとなくですけど」

その理由を、知ることは出来なかった。

乾いた声がへんに響く。

どき、と彼の小柄な身体が倒れ伏す。

「…… 任務は果たせなくとも、仕事は果たさせてもらおう」

倒れたアレの手から立ち昇るものはなんだ。

何故彼の胸に穴が開いている。

どうして彼は…… 死んでいる？

「人間と、刺し違えたのが初戦果か。まったく、試作と名打つだけあって私はつくづく、不良…… だ……」

満足そうな表情を浮かべて目の光を消したシーカー。

彼女も理由を答える事なく機能を停止した。

血溜まりが広がってゆく。命の灯火が消えてゆく。

それは魔術師であった彼女だからこそ明確に分かることであり、

彼が完全に死んでいる事を理解させてしまった。

「マスター？　どうかされましたか、マスター？」

「……え、ええ。なんでもないですよ」

「死んでしまいましたね。良い人だったのに」

「そうだね」

生者と死人を同一視はできない。そのように彼女は育てられている。

だからこそ彼女はいつものように振る舞うのだ。

死者の未練は断ち切らねばならない。

鎌を両手に構え、死体の前に立つ。

呼吸を整え、魔力を回す。

死してすぐの魂は不安定なもの、それ故に魔術で少しだけではあるが干渉が可能なのである。

そのままではさまよえることになってしまうものを、正しき導き手のもと、ここではないどこかへと還す。

それが彼女『墓守』が伝えてきた魔術。

『土は土に、塵は塵に、灰は灰に。』

あるべきものをあるべき場所へ。

我は死神、死を告げるもの。

死とは救済でもなく、救いでも……っ！』

「マスター？ 詠唱はまだ終わりでは」

「ふっ……っ！」

彼女は、鎌で自分の腹を切り裂き、己の腑を掴んで引きづり出した。

「マスター、何をつ!？」

「常連さんの身体を私の身体で修復する。」

まだ魂が不安定な内に押し込めば、まだ常連さんは引き返せる」

「魂を身体に完全な状態で戻すなんて、そんな魔力マスターだけでは到底足りません！

そんな伝手がどこにあるんですか！」

「私を使えばいい！」

AR70は押し黙った。

彼女は彼女の言葉が意味するところを、その代償を知っている。それ知っての上で彼女がそう発言するワケが理解したのだ。

「…… 良いのですか、それで」

「いい。常連さんだから」



「それで、いいんですね？」

「うん」

「良き旅路を、マスター。あなたの道行きが幸せなものでありますように」

S08地区の防衛は成功した。

戦術人形数体の損失はあれど人間の死者は0。

近年稀に見る大規模E・L・I・D襲撃でありながら死者を出さなかった手腕を評価され、S08基地の面々には表彰状が送られた。

またその手腕を評価された情報処理班班長は昇格が決定、かねてより希望していたS09地区B基地に指揮官として配属されることが決定した。

「誰かの死を覆すことが出来る禁呪。

その代償は、自分に関わる記憶が他人全てから消失すること。

……こんなもの、一体誰が使うんですかね」

「お邪魔しまーす！ 今日もお話に来ましたよー！」

「つと、いらつしやいませ」

「おや、今日は珍しく正装ですね、どうされました？」

「なんと明日かねてより希望していた転属届けが受理されたんですよ！ やつと先輩と

働けます！」

「明日、ですか？ ではなぜ制服姿を？」

「ちよいと訳ありで。」

今夜のうちに先輩にあだなす不届きものをブチ殺して、じやなかった、半殺しにしないといけないので、着替える暇もないと思ってこんな格好に」

「大変ですね、頑張ってください」

「転属すればここにも来なくなるでしょうし……いつものください！」

「かしこまりました」

ぺこりと頭を下げて、いつものようにハーブティーをいれる準備をするAR70。もう来なくなるからと考えているのかあたりを見回す常連の男が不意にポツリと。

「そうだ、マスターさんにもお礼を言わなきゃ」

「マスター、ですか？ 店主は私ですが」

「いやそうじゃなくて、もつとこう、別の人が居たような……」

「後にも先にも、この店は私一人ですよ。間違えててませんか？」

「そうでしたっけ……？」

うーんと考え込む常連を尻目にハーブティーを手元に置き、腕を組むAR70。

「確かにうちはよくある雑貨屋で喫茶店ですが、間違えるなんて酷いじゃないですか」

「そう……ですよね。」

「ごちそうさまでした。無理言つて寄つてるので、あんまり長く居られないんですよ」

「そうですか。また来てくださいね」

「はい、今度は先輩と来ますよ！」

『「ではまたのご来店をお待ちしております」』

戸口で腰を折るAR70に誰かの幻が重なる。

見たこともない赤の他人だ。でもきつと。

「ありがとうございます、————さん」

もう一度、名前を呼んであげべきだと思つたのだ。

